

WHC 第10回OB・OG夏合宿記録 (2016年8月7日～9日)

例年より少し遅めになった今年の梅雨明けは、関東甲信に続いて7月29日には東北地方でも明けました。8月に入ると秋田県では安定した夏空が広がり、一方で物騒な飛行体が秋田沖の日本海に落下し、地球の裏側ではリオ五輪が幕開けをしました。

そうした中、2007年に始まり、今年でちょうど10回目となったOB夏合宿は、次の17人が参加して、八幡平の後生掛(ごしょうがけ)温泉をベースにして行われました。

1期…大河内、田中 3期…小川戸

4期…縹(日向寺)、大竹、田上、徳渕、西海、花田、五十嵐

5期…佐藤(高橋)牧子 6期…杉原(綿貫)、柁木(小幡)、佐藤徹

7期…加藤(=初参加) 8期…齋藤(=リーダー)、佐藤憲一

齋藤リーダーの計画書は次のような魅力的な書き出しで始まります。「今年の夏合宿は、大きくなだらかに裾野を広げる八幡平とその周辺を歩いて、原生林の樹海、その中にちりばめられた湖沼や、大小の池塘が散らばり様々な花が咲き乱れる高層湿原、泥火山や噴煙などの火山地形の中を巡り、豊かな自然を満喫する旅です。」と。そのとおり、豊かな自然を満喫した合宿になりました。

* * * *

初日は、秋田新幹線の田沢湖駅からバスで後生掛温泉へ入り、温泉近くの自然研究路を散策しました。

新幹線で東京から2時間50分、列車内で早めの昼食を済ませて、田沢湖駅から貸切バスに乗り、真っ青な空の下、途中鎧畑湖や宝仙湖(玉川ダム)のエメラルドグリーン湖面を眺めながら緑の中を縫うように1時間10分走って、午後1時前に硫黄の香りが漂い、もうもうと噴煙を上げる後生掛温泉に着きました。



荷物を置いてから、宿の周辺にある火山現象や地形を観察できる「後生掛自然研究路」を散策しました。後生掛の名の由来となった「オナメ・モトメ」の噴出口(「後生かけて 逝きにしオナメに又モトメ 香りはつきぬ岩の石楠花」と詠まれる)、94℃の泥湯の紺屋地獄、噴気孔やマッドポット(泥壺)が沢山ある小坊主地獄、日本一と言われる大泥火山、透明な PH1.8



の強酸性の湯が噴出する中坊主地獄、そして、泥湯の集合体とされる広い大湯沼は正面に焼山を望み、振り返れば翌日山頂に立った畚(もっこ)岳が独特の頂をのぞかせていました。その後、片道30分ほどで、濃い緑に囲まれ広々とした風景が素晴らしい大沼へ歩き、反魂草、尾瀬水菊、小葉擬宝珠、沢桔梗、深山川芎、烏兜、大亀の木(虫刈)、穂躰躰、扨花、赤物(実)などの名前を花博士から教授されながら沼を一周して午後5時前に宿へ戻りました。

宿に入って落ち着く間もなく入浴タイム。今回の後生掛温泉は「馬で来て、足駄で帰る後生掛」と謳われる、効能豊かな昔からの湯治場の温泉宿です。研究路で学習した火山現象の要素をそのまま持ち込んだように、肌に当たる気泡が快い「火山風呂」、源泉の蒸気でたっぷり汗をかき「箱蒸し風呂」と「蒸気サウナ」、泥で湿布をするような「泥風呂」、ずばり効能の「神経痛の湯」、白濁の「露天風呂」、仕上げ

は打たせの「滝湯」…あっちへ入りこっちへ入り、いくら時間があっても足りないくらいでしたが、この日はおなかも空いていたので、そこそこにしてお待ちかねの夕食へ。それでも待ちきれない人は、談話室風の一角で早々と缶ビールのプルトップを開けていました。

夕食タイムは冒頭、第1回の唐松岳から10回連続で参加している大竹、徳淵、花田、五十嵐の4人に祝意が、また、夏合宿の創設と継続に力を尽くした西海、繰、齋藤の3氏に謝意が述べられました。料理は、地元秋田のキリタンポ鍋やポークの冷しゃぶに山の幸の数々で、生ビールのジョッキや地酒の盃が進み、順繰りに思い出話や近況が語られ、賑やかなうちにたちまち時間が経過しました。食後は幹事部屋に全員が集まり、持ち寄ったアルコール類やつまみに話の続きを映かせました。

* * * *



石畳の道を歩いて、青空を映の樹林に覆われた八幡平頂から、今度は北に八甲田山とた。この辺りの山へは何度か初めてのことでした。

深山秋の麒麟草や梅鉢草にしたガマ沼、次いで眼下の



2日目は、終日好天の中、八幡平頂上から源太森を往復し、さらに畚岳に登り、森、沼、池塘のある湿原と咲き競う花々、大展望を楽しみました。

気の早い人は午前4時、常人は6時頃から朝風呂に身体を伸ばし、7時朝食、8時出発。宿のマイクロバスで「八幡平山頂レストハウス」まで行き、山母子や野原薊の咲く道から展望台へ。目前の岩手山が大きく、その左に早池峰山、北上山地、さらに姫神山、右へ秋田駒ヶ岳、遠く月山、鳥海山、近くに端正な森吉山と続く山なみに歓声をあげました。登山口から緑の中の

す鏡沼、メガネ沼経由でオオシラビソ上(1613m)へ。階段の上の展望台雲間の岩木山まで見る事ができて来ていますが、これだけの大展望は

の群落の中を下って岩手山をバック八幡沼や行く手の源太森を望む展望

台へ。避難小屋「陵雲荘」で小休止の後、沼の畔から緩やかな起伏の中に池塘がちりばめられた高層湿原を、様々な花を眺めながら源太森(1595m)へ。この間の花はざっと名前を挙げても、唐打草、御山竜胆、紅葉唐松、御嶽菅、深山蘭、深山蛍蘭、三日月草、綿菅、赤花、丸葉岳蓐、毛氈苔、穂になった稚児車、池塘の中で花を終えた三榎など、花博士のおかげで多くの花の名を覚えました。

源太森に着き、遮るもののない灼熱の陽射しの中で昼食。宿の塩むすびにいつもながらの味噌汁、食後のコーヒー、デザートからお菓子までと楽し

わずかの時間を利用した画伯が、八描いていましたが、構図の確かさも色彩で、オオシラビソの濃緑、湿原の淡緑、遠景の薄緑と、緑色を使い分ける

いランチタイムを過ごしました。幡沼から畚岳、鳥海山方面をることながら、軽いタッチの水い緑、中景の山なみの明るい技に感心しました。

復路で八幡沼の南側の湿ような地形には日光黄菅の群



原を通ると、遅くまで雪の残っていた落が見られ、見返り峠の手前からは

懐かしの藤七温泉を望むことができました。



その後、レストハウスから畚岳往復に向かいました。登山口から、ここもオオシラビソの樹林から、四葉鶴、白山防風、白根人参の咲く山道、最後に今合宿唯一急登(約7分間)があつて白山沙参の群落が見られる畚岳(1578m)頂上着。どこからもよく見えていた山頂からの眺めはさすが素晴らしいものでした。岩手山や駒ヶ岳には雲がかかり始めましたが、八幡平はその名の通り、どこが頂上か分からないようななだらかな山容を見せており、居合わせた人が背伸びをして、中腰になった我々をうまい具合の写真に収めてくれました。迎いのマイクロバスでは少し楽をさせてもらい、藤七温泉の玄関先を回って3時半頃宿に戻りました。



この日は少し時間をかけて風呂に入りました。頭の上を風が吹き抜けていく温めの露天風呂で長湯をしましたが、これだけの湯量とスペースがあれば、広さや設備にもう一工夫の余地があるように思いました。時間があつた分だけ談話室の缶ビールが前日より進み、下地を入れてから夕食宴会に臨みました。この日は、牛すき焼きとポークの鉄板焼き、それに川魚の塩焼きがメインで、飲物と賑やかさは前日を上回り、食後も前日同様、幹事部屋で宴会を続けました。

* *

* *



3日目は、遠い台風の影響があつてか雨の夜明けになり、濃いガスも流れていました。予定した湿原と沼巡りを取り止め、8時前に朝食を終えてからはそれぞれ自由時間を過ごしました。朝ドラに続いてオリンピック(体操男子団体優勝と福原愛ちゃんベスト4進出)のテレビに見入る人、朝湯を終えたばかりなのに再度浴室へ向かう人、十分寝足りたはずなのに惰眠をむさぼる人、十分飲んだはずなのにさらにグラスを傾ける人、なにやら慣れないカードゲームに巻き込まれる人、雨が上がったのを幸いと散策に



出る人等々。そうこうしているうちに打ち上げの時間となり、合宿最後の大会。個人的には地ビールを飲み損なつたことが悔やまれます。最後にリーダーから「来年の合宿は8月6～8日」との告知があり、あつという間に過ぎてしまった3日間を終えました。

八幡平(は・ち・まん・たい)を折り込み詠める。

「花と緑と 池塘にいで湯 満喫しました 大自然」

* *

* *

八幡平は、3～6期生がWHC現役時代の1965年(昭和40年)に、91人が参加して行われた最長10泊9日の夏合宿地で、51年前、秋田駒、陸中・早池峰、岩手、八甲田・十和田の各コースからベースとした藤七温泉に集中したのは、奇しくも今合宿の初日と同じ、8月7日でした。

(記録係 五十嵐昭)